
The Iris Murdoch Newsletter
of Japan



No.18

March, 2017

**“Tis well an Old Age is out / And time to begin a New”:
 The Current State of Iris Murdoch Studies in England**

Frances White

This quotation from Dryden’s ‘The Secular Masque’ is the epigraph to Iris Murdoch’s first novel, *Under the Net*. It resonates not only with Jake’s life within the story, but with Murdoch’s own life: in this début work she was leaving an ‘Old Age’ of failure for a ‘New Age’ of success. In terms of Iris Murdoch studies we are happy to announce that we are moving from an ‘Old Age’ of success at Kingston University London to a ‘New Age’ at the University of Chichester which will be equally successful.

This may come as a shock, but Iris Murdoch never *belonged* to Kingston. It was happenstance that her name has been associated for so long with that particular university. First, one of her earliest critics and biographer, Peter Conradi, was teaching English Literature there from the early 1980s to 1997. He taught the work of Iris Murdoch and, under his auspices as Professor, she was awarded an honorary degree at the University in 1993. Second, a student called Anne Rowe participated in the Iris Murdoch module inaugurated by Peter. Anne taught at Kingston from 1992 to 2016, and she picked up the baton left by Peter, teaching the Iris Murdoch module to further generations of students. Third, when in 2002 John Bayley put Murdoch’s Oxford library on the market, Avril Horner, who was then Professor of English at Kingston, had the vision that Kingston would be the most appropriate home for the library, and the Centre for Iris Murdoch Studies was launched at Kingston in 2004. Since then we have had a further four international conferences there and the *Iris Murdoch News Letter* metamorphosed into the professionally produced *Iris Murdoch Review*, for the first six issues of which Anne was editor. In 2007 Murdoch’s London library was added to the Oxford library; Peter placed material gathered as he worked on her biography in the archive, and we began to acquire letter-runs from many sources (now over 3000 letters). The Iris Murdoch archive is heavily used by scholars from around the world with the guidance of our dedicated archivist Katie Giles whose unstinting support for Murdoch studies has greatly contributed

to its expansion.

Now we open another chapter in this history, also partially by happenstance. Anne retired last July, and we sadly thought that the future of Murdoch studies would be in jeopardy. But in October 2015 Dr Miles Leeson invited me to the University of Chichester to give a guest lecture to his students. Realising that Miles was inspiring the next generation of readers by teaching Iris Murdoch to his undergraduates, I wondered to Anne whether he would be the best Murdoch scholar and teacher to take on the baton from her. To our delight, Miles graciously agreed to do so and the first issue of the *Iris Murdoch Review* under his editorship has just been published. Furthermore, Anne and Miles successfully liaised with Kingston and Chichester universities to form a collaborative partnership between the Iris Murdoch Archive Project which Anne is continuing to lead at Kingston and the new Iris Murdoch Research Centre of which Miles is Director. This new centre was launched at the University of Chichester on 10th October 2016.

The increasing number of Murdoch centred events initiated from outside the Iris Murdoch Society base is encouraging. In December 2014 Silvia Panizza organised a symposium at the University of East Anglia, 'An Afternoon with Iris Murdoch'; Gary Browning convened a conference at the Ashmolean Museum, Oxford in November 2015 called 'Why Iris Murdoch Matters: Truth and Love'; and a conference was convened by Paul Lodge at Mansfield College, Oxford in June 2016, called 'The Philosophy of Iris Murdoch'. Paul told us that he thinks 'Murdoch will become a fixture in the history of 20th Century philosophy as it starts to get more solidified' and that we are seeing the start of this. Iris Murdoch would be surprised as well as delighted that her work is now being studied and taught at Oxford University. Murdoch's cultural status as an iconic figure in the art world was affirmed by her being the subject of the National Portrait Gallery Lunchtime Lecture in July 2016, 'The Mystical and Mysterious Iris Murdoch'.

Looking to the future, Lucy Bolton plans a symposium on Iris Murdoch and Simone Weil at Queen Mary University of London in February 2017 and is convening a panel for another event at the National Portrait Gallery in October 2017. The first Iris Murdoch conference to be held at Chichester will be in September 2017. We hope to welcome our Japanese Murdoch colleagues and friends to this new Iris Murdoch Research Centre in the beautiful county of Sussex which is rich in literary history, and they will also continue to be welcome to study in the Iris Murdoch archive in Kingston.

(Editor of the *Iris Murdoch Review*

Deputy Director, Iris Murdoch Research Centre, University of Chichester)

マードックの老い

塩 田 勉

1 キケロ・玄白・川柳子

キケロの『老年論』曰く。年を取ると仕事がなく無為に過ごさねばならない、体力は落ちる、セックスもできない、死期も近づく、そう世間は言う。だが、老人は船の舵手のように静かな役割を務め、体力も期待されず、セックスも縁がなくなれば若い時のように肉欲に惑わされることなく、本来の自分に還って生きられるようになる。死が近づくというが、いつまでも生きようとせず、しかるべきときに消えてゆくことこそ望ましい。終わりだと思えば、勇気ある諫言も辞さなくなれる。「老人だからできるのだ」、とソロンが言ったように。

杉田玄白『ぼうてつどくこ耄耋独語—老いぼれの独りごと』は語る。「自分が自分の思いどおりにならなくなる」。「同じ話をなんどもしては人に笑われ、親しい友人の名前や、朝に夕に使っている召使の名前まで呼びちがえるようになって……日用品のたぐいも……忘れては困るとしまいこんではその場所を忘れてしまう、……いま手に持っているものを忘れて探しまわることもある。……そんなふうになっていながら、役にもたたない古いことはおぼえていて忘れない」(日本の名著、『杉田玄白』)。

シルバー川柳は詠う。「耳遠くオレオレ詐欺も困り果て」(岩間康之)、「いたわりも耳が遠くてどなりごえ」(浅羽きみゑ)、「なぜ消える眼鏡と鍵のミステリー」(涌井悦子)、「暑いのでリモコン入るとテレビつく」(佐々木郁子)、「ハイタッチ腕が上がらず老タッチ」(春十八番)、「脳のシワ顔に出ると孫が褒め」(楠畑正史)、「その昔恐竜見たかと問う曾孫」(岡崎万紀子)。避けられぬ老い。だがマードックのそれは、キケロも玄白も川柳も描かぬ老いだった。

2 記憶の消滅

1996年、アイリスが76歳のとき、広範な認知能

力を喪失しつつあると診断された。コンピュータを使用して、彼女の作品の単回出現語彙と語彙頻度を調べたところ、単回出現語彙がもっとも少なかったのは、『ジャクソンのジレンマ』、最も多かったのは『海よ、海』であった。最終作品の語彙は最も月並みで、最盛時の『海よ、海』の語彙は最も際立っていた (*Telegraph*, 1 Dec 2004)。「アルツハイマーは、忍びよる霧のように、周囲のものすべてが消え去るまで、ほとんど気付くことのない病気だ」(Bayley, *Elegy for Iris*, p.218)、と云う。だからアルツハイマーを本人は描くことができなかった。アイリスの豊かすぎる語彙も痛ましく萎んでいった。

アイリスは、洗面も着替えも忘れ、時間が分からなくなり、見慣れぬものを恐がり、ネズミのような泣き声を立て、同じ質問を執拗に繰り返し、コカ・コーラの空き缶やら、スパナーやら、片方しかない靴を拾い集めて (Bayley, p.268)、家をゴミ屋敷にし、止めどなく散歩や旅に出たがった。

ジョンとアイリスは、例えばクリスマスには、判で捺したように、鮭とソーセージとスクランブルド・エッグを、ブルガリアの赤ワインで楽しんだ (Bayley, p.274)。そういうルーチンが記憶の代替物になる。ルーチンをこなしている間は、「どこに居るの、何しているの、誰が来るの?」と不安から来る質問をしなくなる (Bayley, p.271)。

リア王やオイディプス、ゴリオ爺さんのように頑迷になる老いとは異質な老いがアイリスを見舞った。死は「覚えずして来たる。沖の干潟ひがたはる遙かなれども、磯より潮の満つるがごとし」と兼行が言ったように、アルツハイマーは気配もなく記憶を抹殺してゆく病だった。類い希な構築力も華麗な語彙力も忘却の淵に沈められていった。彼女は、消えていく記憶の地平線の手前に辛うじて『ジャクソンのジレンマ』を残すことができたけれども、読者にとっては、さながら手塚治虫の

絶筆『ネオ・ファウスト』のように、希代のナラティヴ・パワーが突然脱力し、細部を組み上げるはずのボルトが抜け落ちて野ざらしになったよう

な作品を目の当たりにしなければならない辛い巡り合わせとなった。

第 18 回大会報告記

岡野浩史

第18回日本アイリス・マードック学会は香川県善通寺市の四国学院大学で、2016年10月22日(土)に開催された。

最初に、12時30分から総会が開催された。まず、ハラ会長から挨拶があり、今年で本学会が第18回を迎えることの意義が熱意を込めて語られた。また、開催校の担当者として大会の開催のために尽力してくれた中西氏に感謝のことばが送られた。また、事務局に対しても労いの言葉があった。次に副会長である井上澄子氏の喉の不調により、代わりに大槻理事から午前中に開かれた理事会について報告があった。まず、来年度の学会の開催地については、明治学院大学とすること、日程の第1候補は11月18日、第2候補は11月25日とすることが報告された。ただし、日程の最終決定については担当校の事情で時間がかかるかもしれないとの説明があった。次に来年度の企画について説明があり、研究発表については例年どおりだが、特別講演についてはハラ会長から講師として国際アイリス・マードック学会の Anne Rowe 氏を招聘する案が出されたことが報告された。これに対して学会員から、費用はどうするのかという質問があり、費用については、明治学院大学から一部の助成を得ることができる可能性があり、宿泊についても同大学の施設の利用が可能である旨の説明があった。Rowe 氏が無理な場合は他の同学会関係者にあたってみるとの案や在日本のイギリス人俳優によるマードックの詩や文章の朗読の企画案もハラ会長から出されたことも報告があった。また、井上副会長が再任されたこと、理事については現状維持であることが報告された。事務局からの住所変更連絡や企画提案依頼などのあと、会計報告があり、昨年度の特別講演講師であった野中涼氏が

学会の財政に配慮して交通費も講演謝礼も受け取らなかったことが報告され、謝意が表明された後、2015年度の収支決算報告、2016年度予算案及び収支の中間報告が了承された。

今年の研究発表は中窪靖氏の「*The Sacred and Profane Love Machine*」を読む——アイリス・マードックの描く「メロドラマ」と題した発表で始まった。司会は野口ゆり子氏。

中窪氏はこの作品を Peter Brooks などの諸説を援用しつつ、「メロドラマ」的に読む可能性を具体的な登場人物の分析を通じて示した。発表は新たな読みの枠を提示することで同作品の持つ豊かさを改めて示すこととなった。

次に多和恵子氏が「日本哲学への近接—アイリス・マードックと西田幾多郎における善の観想と小説『鐘』におけるドーラ・グリーンフィールドの人物造形と日本学会との親交からの精神的影響」と題して、西田哲学の善とマードックの作品における善との比較発表を行った。司会是小林信行氏が務めた。発表後、ニューズレター第16号に掲載された学会の初代会長である室谷氏の投稿記事に使われていた写真それぞれについて多和氏からコメントがあり、フロアからの意見を求めたあと、日本とマードックとの関係を研究していくことの重要性が訴えられた。最後に Fiona Tomkinson 氏に捧げる詩が披露された。

次にトルコから参加した Fiona Tomkinson 氏が「*Bruno's Dream: Murdoch's Intertextual Web*」と題して Wendy Jones Nakanishi 氏の司会により発表を行った。トルコの政情不安定により、最初は Tomkinson 氏の参加が危ぶまれたが、結局、出国が可能となり無事の来日・発表となった。氏はこの作品のテキストが Arnold Bennett の

Clayhanger やイタリアの哲学者 *Giordano Bruno* のテキストとも深い近縁性を持つことを示し、さらに *William Blake* の詩 “*The Fly*” や他の小説家の作品にも触れながら、氏ならではの豊かで独創的な読みを披露した。

4番目の発表者は小野順子氏で、司会は井上澄子氏が務めた。小野氏は一昨年イギリスに滞在して *Anne Rowe* 氏の講義を受けた経験を話した後、「『黒衣の王子』に見る愛の力」と題して研究発表を行った。小野氏はこの作品を「自我の死を描きながら愛に殉じる物語」とする立場から、*The National Portrait Gallery* にあるマードックの肖像画の背景として使われたティツァーノの絵「マルシュアスの死」のマルシュアスと物語の主人公ブラッドリーを重ね合わせながら「愛の力」を論じた。思い入れのこもった発表に深い感銘を受けたフロアからは活発な意見が出された。

最後の発表は、*Paul Hullah* 氏が “*Kestrels and Storks: A Defence of Murdoch’s ‘Self-Deluding’ Faith in the Sovereignty of Good*” と題して、筆者の司会により発表を行った。ハラ氏はイギリスの批評家 *John Carey* 氏が、その著書 *What Good Are The Arts?* において “*The Sovereignty of Good*” からの一節を取り上げてマードックを酷評していることを紹介し、ケアリー氏の解釈・評価がまったくの見当違いであることをマードックの詩の援用もしながら指摘し

た。ハラ氏の見解に、司会である筆者も賛同した。同著の中でのケアリー氏のマードックに対する評言は言いがかり的なものでしかない。

研究発表のあと、浜野研三氏により、「歌を忘れたカナリヤに歌を思い出させるもの：マードックの道徳的实在論と文学」と題して講演が行われた。司会は当学会会長の *Paul Hullah* 氏が務めた。浜野氏からはあらかじめ、学会の開催される1週間前に講演のためのハンドアウトのファイルが事務局に送られ、参加者はそれに事前に目を通してから講演に臨むことができた。浜野氏は、具体的に、マードックの文章の一つひとつにもとづいて彼女の哲学の意義、現代的意味を解き明かし、私たちがその小説を読み理解するために、極めて有効な道筋を示してくれた。氏の魅惑的な語り口には時の経過を忘れさせるものがあり、じつにすばらしい講演であった。深く感謝したい。

学会終了後、「こんびらさん」近くの琴参閣に場所を移して懇親会が行われた。極上の料理に舌鼓を打ちながらの約2時間の談笑の後、来年の明治学院大学での再会を約して解散となった。

今回、会場を提供し、細やかな心遣いで学会を支えてくれた四国学院大学の中西ウエンディ氏には心から感謝の意を表する次第である。夫君丹精のミカンも極上だった。

特別講演要旨

歌を忘れたカナリヤに歌を思い出させるもの： マードックの道徳的实在論と文学

浜 野 研 三

哲学者としてのマードックが批判の対象としていたものは、実存主義とオックスフォードの日常言語学派である。彼女の批判の独創的で興味深い点は、対立こそすれまったく共通点などないように見える二つの哲学思想の中に、共通の問題点を

見出しそれに対する代案を伴った批判を行ったことにある。

日常言語学派と実存主義に共通する問題点とは、その中核的な人間像にある。それによれば、人間は自然科学が描いてみせるドライで客観的な

世界の中で自らの意志により決断をし、行動する存在である。このような客観性の理解や世界観・人間観は大事な概念や語彙が失われた結果であるとマードックは主張する。マードックの批判的の一つは、認識主体の関与があればそれは主観的でありしたがって正しい認識ではない、という科学主義的な狭い客観性の理解である。それに対してマードックは、主観が関与しつつ事実を正しく捉える可能性を認める、より広い客観性の概念を受け入れている。そのような広い客観性の概念の下に現れる世界は、自然科学が描くある意味で単純で理解しやすく思われる世界ではない。現実の世界は、美的な価値や道徳的価値を持っており、それらはきわめて複雑で完全性を有するものであり、有限な人間存在には、容易に把握しがたいものである。マードックはその側面を世界の密度の濃さ (density) と表現している。

しかし、われわれ人間は自らの肥え太った容赦のないエゴの力に容易に惑わされ、世界を単純化し、自分に都合がよいように理解しがちである。その結果世界を正しく理解するために不可欠な概念や語彙を失い、ファンタジーの中に生きることになる。このような忘却により豊かさを失った世界・人間理解に対して、マードックは、再び思い出すべきものを様々な形で述べる。

何よりもマードックが強調することは、人間の意識には常に道徳的次元が伴っていること、及びよき生にとっての道徳的な徳の涵養の大切さである。それに関連してマードックは、シモーヌ・ヴェイユの影響の下、注意の大切さを強調し「愛情に満ちた公正な眼差し」などの表現を用いて、より具体的な説明を試みている。エゴの惑わしに負けることなく正しい認識を得るためには、このような眼差しを持つこと、そのための絶え間のな

い努力が不可欠なのである。

正しい理解を得る努力は善・完全性を遙か彼方に仰ぎ見ることにより促されるとともに、自己の現実との落差をも感じざるを得ない。ここで注意すべきことは、マードックが語る超越的な善・完全性は、われわれの経験的世界を超えたものではないことである。通常の意味で形而上学的なものではなく、あくまでわれわれの経験の世界に属しつつ、そのあまりの完全性・至高性のゆえに超越的なものと呼ばれているのである。自己にとって、他者そして自己自身も不透明・不分明な存在であり、その正しい認識は、非常に困難なのである。「超越性」は、上で述べた人間の有限性に根差すべきものとの落差の痛切な自覚に基づく表現なのである。

以上のようなマードックの立場からは、自由は日常言語学派や実存主義とは異なったものとなる。すなわち、現実をより正しく理解するとき、自ずからいかに行動すべきかが決まってくる時、人は自由なのである。自由は、自律的な意志の決断などとはおよそ異なるものとして理解されるのである。

さらに、私の解釈では、マードックは、エゴの誘惑を退け密度の濃い現実をありのままに理解し描くために、道徳的価値評価と記述的要素が分かちがたく結びついている二次的価値語 (secondary value word) と呼ぶ語彙を駆使し、複雑な世界や人間同士の関係や繋がりを描こうとすることに文学の課題と目標があると述べている。このようなマードックの主張は、価値と事実の峻別を否定する議論を先取りした独創的なものであり、マードックの文学が目指すところを示すものであると言うことができる。

(関西学院大学教授)

The Sacred and Profane Love Machine を読む — アイリス・マードックの描く“メロドラマ” —

中 窪 靖

The Sacred and Profane Love Machine (1974) (以下、*SPLM* と略記する) は、夫婦関係を中心に、登場人物たちが相互に交錯する関係の織りなすプロットで構成されている。

主人公のブレイズ・ガヴェンダーは、二人の女性のおのおの二つの家庭を作っている。彼の妻の一人、ハリエットは近くに住む作家モンティー・スモールに愛されていると錯覚し、彼に受け入れてもらおうとする。それは、夫ブレイズとの関係がうまくいかないことに起因している。ハリエットは、夫が別に家庭をもっていることを知るのである。しかし、モンティーは彼女を受け入れることはない。モンティー自身は亡き妻ソフィーへの思いを断ち切れずにいる。彼は、癌になった妻を救えなかったことを悔やみながら生きている。

ブレイズのもう一人の妻であるエミリーは、彼と最も価値観の合致する女性であるが、彼女との出会いは運命のいたずらとしか言いようがない。もしも彼が最初に彼女と出会っていたら、彼の人生は物語の描くものとは異なっていたかもしれないのである。

ハリエットとエミリーとは、住む世界が異なる。特に、労働者階級に属するエミリーは、ハリエットの住む中産階級への憧れと嫉妬の気持ちで悶々としている。エミリーは哲学者メルロ・ポンティに関心をもつインテリでもある。この点では、彼女は精神分析を生業としているブレイズと知的な領域で理解し合うことができる人物である。

また、ブレイズのもつ家庭には、それぞれに子供が一人いる。二人の子供たちは、どちらかといえば、物語の背後でそれぞれの役割を演じていると言えるかもしれない。特に、エミリーの息子の

ルーカは、物語を結末に導くための重要な役割を負っている。

このように物語のプロットをたどると、この作品は人間の世俗的な側面を強調して描かれていることがわかる。運面の人との出会い、妻の不慮の死、そしてとりわけ主人公の利己的とも思える夫婦関係の構築などである。それは、いわゆる「メロドラマ」的な構成の物語であると言えるのではないか。これはまさに、この作品のタイトルの、「Sacred and Profane すなわち、神聖でありかつ俗である」という部分と合致している。

さらに、主人公の世界に時に関わりつつ、時に傍観者として観察を続けるモンティーがいる。作家である彼は、架空の人物マグナス・ボウルズを創造し、ブレイズとハリエットの生活に関わりを持ち続ける。作家であるという点に注目すると、彼は作者アイリス・マードックの分身の役割も兼ね備えているという想像も可能である。

現代では映像の分野で「メロドラマ」という語がしばしば使用されている。もともとは、18世紀のフランスの音楽劇についての使用がこの語の発祥とされている。また、19世紀の作家オノレ・バルザックやヘンリー・ジェイムズ作品についても、「メロドラマ」的要素が指摘されている。

本発表では、以上の点を鑑みながら、Peter Brooks の著書 *The melodramatic imagination: Balzac, Henry James, melodrama, and the mode of excess* を手掛かりに、特に物語の中心に位置するブレイズとハリエットの夫婦関係を大きく反映している二人の手紙のやり取りに注目することで、「メロドラマ」的側面からマードックの *SPLM* (1974) を分析した。

Bruno's Dream: Murdoch's Intertextual Web

Fiona Tomkinson

In the last paragraph of *Jackson's Dilemma*, Murdoch, perhaps in consciously valedictory mode, gives us the image of a spider in its web, which she probably saw as a metaphor for her own art as a spinner of fictions. *Bruno's Dream* is also a novel about webs: the spiders' webs that fascinate the dying arachnologist, Bruno, the web-like trap in which Nigel pinions the sleeping Will, and, of course, the complex webs of human relationships and deceptions which constitute the plot. However, Murdoch also weaves another web of allusion and parallelism - a web of intertextuality. Robert Irwin has pointed out some of its elements: Tolstoy, Plato, Wittgenstein and Weil. It is the aim of this paper to explore some of its even stranger connections.

The first is a clear series of allusions to Arnold Bennett's *Clayhanger*, a novel set in the Staffordshire Potteries, in which the eponymous hero, Edwin Clayhanger, ardently desires to be an architect, but his father forces him to go into the family printing business. Likewise, Bruno Greensleave wanted to study zoology, but his father had made him go into the family printing business. However, he poignantly combines aspects of Edwin with aspects of his father, Darius Clayhanger, in his last illness. Murdoch's three references to Wedgwood plates (also produced in the Staffordshire Potteries) make it clear that the parallel is not accidental.

The second thread involves a number of passages which allude more subtly to Bruno's namesake, the Renaissance philosopher and heretic Giordano Bruno. The parallel might seem a strange one given that Giordano Bruno apparently died fearlessly whilst Murdoch's Bruno has lost his faith and fears annihilation. However, Bruno in the *Eroici furori* gives us the Diana-Acteon myth as the ultimate symbol of the philosopher's quest for the divine gnosis and Murdoch's Bruno achieves his own moment of gnosis as he dies holding the hand of a woman called Diana. Moreover, Giordano Bruno's depictions of the infinite universe bear a close resemblance to a spider's web.

Thirdly, there are a series of allusions to Blake's poem 'The Fly'. Fourthly, the love-death polarity of the novel and the mysterious nature of the character Nigel can best be understood in relation to T.F. Powys's novel, *Mr Weston's Good Wine*. These four threads give us a continuum from the realistic, through the cosmological-philosophical, to the mystical and an awareness of them deepens our appreciation of this multi-layered novel.

(Associate Professor, Yeditepe University. Nagoya University from April 2017)

『黒衣の王子』にみる愛の力

小野 順子

『黒衣の王子』は、物語の本体をなす一人称の物語（ブラッドリーの物語）、小説の編集者とブラッドリーによる序、さらにブラッドリー、主要な登場人物と編集者による後記が付け加えられているという構成になっている。主要な登場人物は、「ブラッドリーの物語」は真実を伝えていないと書く。しかし「ブラッドリーの物語」を深く読んだ人には、彼らの書いた後記は、「ブラッドリーの物語」の人物ならこのように書く、すなわち、彼らにしか書けない後記であることが判る。それ故に発表者は、彼らの後記は、ブラッドリーの人物描写が的確であることを証明し、彼の本が真実に近いことを示していると考ええる。

「ブラッドリーの物語」において描かれたブラッドリーのジュリアンへの性愛が、本を書く源泉になることを見る。さらに性愛が至高の愛へと変容することについて考察する。マードックは、ティツィアーノの作品『マルシユアスの処刑』において死を目前にしたマルシユアスの顔に微笑みを見、その微笑みを「自我の死」と解釈している。ブラッドリーの到達した境地が、マードックの考えるいまわの際のマルシユアスの境地に近いものであることを明らかにする。

ブラッドリーの『ハムレット』への心酔が、ジュリアンへの性愛、ブラック・エロス（愛する人を渴望し、その人の肉体を所有したいという愛）を喚起する。ジュリアンもブラッドリーの愛を受け入れ、二人は、パタラという名の海辺のバンガローへと逃避行する。ブラッドリーは、後に監獄でアポロの化身、ロクシァスに出会うことになるので、この地名をパタラとした。ジュリアンは、ハムレットの衣装を着て、浜辺で拾った波で洗われた羊の頭蓋骨を持ってブラッドリーの前に現れる。彼は、ハムレットに喚起されるように、激しい欲望に襲われ、思いを遂げる。彼女は、彼の激情に驚きながらも、彼の行為を愛の行為とし

て受け入れる。

ブラッドリーはジュリアンと結ばれた後、二人の体は、霊的交感に包まれていると感じる。彼にとって、ジュリアンは、性愛の対象であるだけでなく、人間界と神の国（霊的世界）との仲介者のような神格化されている存在になっていく。ジュリアンも、彼と一体化する愛の恍惚感に浸る。性愛の極致を体験した彼は、経験したことの無い力、本を書く力を得たように感じる。性愛は、芸術、美、知識などを求める創造の型と神を求める道徳性と同じ人間の欲望である。エロスは、性愛という人間の欲望を高い道徳と創造する力に結びつける仲介する霊である。エロスなくしては、創造する力も、崇高なものを求める道徳も存在しない。ブラッドリーは、ジュリアンと結ばれることによって「ブラッドリーの物語」を執筆する力を得る。

無実の罪で起訴されたブラッドリーを支えたのは、ジュリアンへの愛と愛の体験への感謝である。彼は、ジュリアンとの愛の成就を奇跡とみなす。奇跡への代償として、不当に裁かれる苦しみを受容する。彼は、レイチェルを赦し、アーノルドとプリシラの死に責任を感じる。ジュリアンへの性愛は、ジュリアンの幸せを願う「無私の愛」へと昇華する。

アポロの化身である獄中の友人、ロクシァスの励ましで、彼はジュリアンへの愛を描いたこの本の執筆へと向かう。無実の罪で獄中に繋がれるという苦しみを受け、その苦しみを他者に転化することなく純粹に苦しみながら、ジュリアンに捧げる物語を執筆する過程において、ブラッドリーは賢明な人になっていく。彼は、人々がいかにか違った人格をもっているか、そして何故違っているのかを寛容な愛情に満ちた目で見ることができるようになり、真実に近いこの物語を書くことができた。マードックは、「性愛を経て人は、

至高の愛を得ることができる。性愛は、私たちに創造的徳へと変容できるエネルギーを与える」(Existentialists and Mystics 416)と信じている。マードックは、試練を経てジュリアンへの性愛が彼女への無私の愛へと変容し、自分に罪をさせたレイチェルを許し、周囲の人を思いやる人になったブラッドリーを描くことによって自分の信念を伝えている。

物語が完成したという達成感と、ジュリアンは永遠にこの物語の中で生き続けるという思いによって、ブラッドリーは自己の執着から解放されていったと推察される。彼は、過去を悔み、明

日を思い悩むことを止めて、現在を大切に生きるという気持ちになる。苦悩と試練を経なければ得られないと言われ、ほとんどの人間にとって到達不可能な最終段階である「自我の死」、自我の超克に近い境地に彼が至ったと考えられる。

無実の罪で獄に繋がれながら、この物語を執筆する彼の姿は、皮を剥がれて苦しむマルシユアスの姿と重なる。力を出し切って物語を書き上げ、全てを受け入れているブラッドリーの心境は、精一杯生き、笑顔を浮かべて死んでいったマードックの考えるマルシユアスの境地（自我の死）に近いものである。

研究発表要旨

Kestrels and Storks: A Defence of Murdoch's 'Self-Deluding' Faith in the Sovereignty of Good

Paul Hullah

This new paper seeks to explicate, clarify, and to a certain extent defend Iris Murdoch's notorious and fundamental keystone belief in the sovereignty of *goodness*, and discuss her considered, consistent reverence for goodness over 'God'. Here, I address and examine the 'sovereignty of good' as a concept, rather than analyze and decode the important book of that name, though it is, of course, expedient and necessary to refer in some detail to that work, in order to extract some basic points of Murdoch's intellectual position in this area.

Simultaneously, I endeavour here to demonstrate that Murdoch's championing of this relatively down-to-earth, commonsensical, Zen-inspired, and very humanistic worldview was, of its time — the 1970s: heyday of linguistic gymnastics and semiotics — both controversial and challenging. I suspect (in fact, I am certain) that Murdoch knew this, and this fact might well have considerably strengthened her resolve to nail her colours to the mast of such a philosophical flagship throughout her long career as a multi-faceted writer of novels, philosophical essays, and verse. I offer evidence for this opinion too.

Murdoch's philosophy of good remains controversial today, regarded as naïve and overly simplistic by a number of seemingly insecure, rather supercilious philosophers deemed to be more 'professional' than Murdoch was and still is (I think unfairly) supposed to be. In this paper, I specifically address the forthright criticisms of the 'self-

deluding' Murdochian vision made by the former Oxford don John Carey in his (otherwise excellent and imminently readable) study, *What Good Are The Arts?* (2005). I do so firstly by reference to Murdoch's own philosophical works (particularly *The Sovereignty of Good* (1970)), and then by analyzing 'John Sees A Stork At Zamorra', a fascinating and (like her philosophy) deceptively-simple short poem of Murdoch's, which can be found in my own and Professor Yozo Muroya's authorized *Poems by Iris Murdoch* (1997).

Only recently, Professor Kieran Setiya, ethics and epistemology specialist in the Department of Linguistics and Philosophy at MIT, has thrown down a gauntlet, stating that: 'If Murdoch is to speak more audibly . . . so that she cannot be ignored, her ideas must be reframed as interventions in existing disputes, her arguments must be recovered, and her conclusions made clear. With notable exceptions, few have taken up this task; there is a lot to be done.' I have decided to pick up that gauntlet, and I take up that task in this paper, attempting to do something good along the way.

寄稿欄

アン・ロー先生の講義を聴講して

小野 順子

私は、2014年9月から2015年7月までロンドンに滞在し、キングストン大学でロー先生のマードックの小説についての講義を聴講しました。週1回2時間、30単位の授業です。それは、マードックの小説を歴史的、文学的、社会的な背景の中で捉え、彼女の小説を深く理解することを目指しています。前年は、学部の学生は25人でしたが、私が聴講した年は、6人でした。さらに博士号習得を目指す人、研究者も参加していました。9月から3月まで、講義とセミナーで、4月から6月は、自主学習でエッセイを提出します。

授業では、1~2週かけて一冊の本を扱いました。本、副読本や資料を前もって読んでいることを前提に講義が行われ、さらに議論をしました。本は『網のなか』、『砂の城』、『良きひとと善きひと』、『天使たちの時』、『言葉の子』、『海よ、海』、『善き弟子』、『ブラック・プリンス』です。副読本として、*Existentialists and*

Mystics, Metaphysics as a Guide to Morals の中のその時読んでいる本に関連した論文、ロー先生の *The Visual Arts and the Novels of Iris Murdoch*, "Policemen in a Search Team: Iris Murdoch's *The Black Prince* and Ian McEwan's *Atonement*" などを読みました。

授業の一環としてバメラ・オズボーン先生による「マードックの遺産」についての講演もありました。大学に併設されているマードック・アーカイブスを見学しました。さらに小説に出てくる絵を鑑賞するためにナショナル・ギャラリーに行きました。絵は、『鐘』、のヒロイン、ドーラが深い感銘を受けたゲインズバラの『蝶を追う画家の娘たち』、『神聖で俗な愛の機械』のハリエットが張り裂けるような思いに捕らわれたジョルジョーネの『聖アントニウスと聖ゲオルギウス』、と『良きひとと善きひと』のリチャードとポーラにとって官能のあかしであるブロンジーノの『ピーナスとキューピットの寓意』です。ロー先生は小説の

なかで絵画の出てくる文章を抜粋したプリントを配り、学生の質問に周囲の迷惑にならないように小声で丁寧に答えられていました。その事が、印象に残っています。

この授業を受けて、理解するのが困難であったマードックの小説の中に流れている哲学をある程度理解できるようになったと思っています。何度も、自分で足を運んだナショナル・ギャラリーや、ウォレス・コレクションで小説に登場する実物の絵画を鑑賞することによって、絵画が彼女の小説

と深く結びついていることを実感として受け入れることができました。滞在中、小説の舞台となったロンドンを散策しました。例えば、『ブラック・プリンス』の舞台となったフィッツロビア界限は、大都会の裏町で、むさくるしい雰囲気を漂わせていました。

快く聴講させてくださったロー先生に深く感謝しています。

事務局からのお知らせ

第19回大会について

第19回大会は2017年秋に明治学院大学で開催予定です。日程が決まり次第学会員の皆様にはご連絡いたします。

研究発表、特別講演、懇親会などを計画しています。

研究発表については以下の要領で発表者を募集いたしますのでご応募くださるようお願いいたします。

マードック本人に限らず、マードックと同時代の作家、思想的な類似性をもつ作家、マードックが関心を寄せていた作家、マードックに影響されたと思われる作家などに関する研究発表も受け付けます。発表テーマに発表要旨（日本語の場合は1200字程度、英語の場合は400 words 程度）を添えてお申込みください。

応募資格：日本アイリス・マードック学会会員

発表時間：発表25分、質疑応答5分

締切日：2017年6月末日

申し込み：氏名、所属、住所、電話を明記して
〒347-8504 加須市水深大立野2000
平成国際大学 岡野浩史研究室内
日本アイリス・マードック学会事務局 まで

会計報告

2015年度会計報告

(2015年1月1日～2015年12月31日) (単位：円)

収入の部

前年度繰越金	387,317
年会費	183,354
寄付	5,000
合計	575,671

支出の部

事業費

ニューズレター印刷費 (印刷会社からの送料を含む)	45,900
総会・研究発表会運営費	22,754
内訳 学生アルバイト料	18,000
茶菓	4,754

管理・通信費

ニューズレター郵送料	5,775
印刷費振り込み料	648
はがき代	4,004
通信費	3,405
プログラム郵送料	5,880
ホームページサーバー使用料	5,358
ホームページドメイン代	4,125
ホームページ更新料	13,000

その他

懇親会補填	7,000
室谷先生叙勲記念品代	5,405

合計 123,254

差引残高 452,417

原稿募集

マードックの人物像や作品の研究に纏わる新発見・苦労話・未公開の写真や資料などの原稿を募集致します。肩の凝らない内容で結構です。ふるってご投稿くださいますようお願いいたします。

本文：1600字程度、MSワードで作成をお願いいたします。(手書き原稿も受け付けます。)

締切り：2017年10月31日

送先：斎藤佳代子宛

kayo_aqua@oregano.ocn.ne.jp

または

〒216-0003

川崎市宮前区有馬8-19-4

編集後記

ニューズレター第18号をお届けいたします。すばらしい原稿をお寄せくださいました先生方をはじめ、多くの先生方のご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。相も変わらず、何かと行き届かない点多々あったかと思いますが、ご容赦いただければ幸いです。

今後も、ニューズレターへのご協力を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本アイリス・マードック学会役員名簿

会 長 Paul Hullah (明治学院大学)
副会長 井上澄子 (千里金蘭大学・名誉教授)
理 事 井上澄子 (千里金蘭大学・名誉教授)・
井内雄四郎 (早稲田大学・名誉教授)・
大槻美春 (千葉大学非常勤講師)・
大道千穂 (青山学院大学)・岡野浩史
(平成国際大学)・塩田勉 (早稲田大学・
名誉教授)・平井杏子 (昭和女子大学・名
誉教授)・Paul Hullah (明治学院大学)・
Wendy Jones Nakanishi (四国学院大学)
監 事 中窪靖 (京都文教大学)
内藤亨代
事務局 岡野浩史 (平成国際大学)
会 計 岡野浩史 (平成国際大学)

マードック学会ホームページアドレス

<http://irismurdochjapan.jp/jp/>

The Iris Murdoch Newsletter of Japan No.18

発行者 日本アイリス・マードック学会
会 長 Paul Hullah
編 集 斎藤佳代子
事務局 平成国際大学 岡野浩史研究室
〒 347-8504 加須市水深大立野 2000
Tel. 0480-66-2100 Fax. 0480-65-2101
e-mail: okano@hiu.ac.jp